

みんなが暮らしやすくなるために

南陽市立沖郷中学校 一年 寺島 東吾

「あの人何であんな風になっているのだろう。」

道を歩いていると一人の足の不自由なおじいさんが歩いていた。僕はまだ幼くて、「あの人何をやっているのだろう。」と疑問に思い、つい口に出してしまった。

しばらくたっていくうちに、あの時会ったおじいさんの気持ちが分かっていくような気がした。自分は両足で歩けるのに、あのおじいさんは片足で頑張って歩いているのだ。あのおじいさんが苦痛を乗り越えて頑張って生きていることを、幼い頃の僕は知らなかった。

小学六年生の頃、僕は障がい者の方を見かけても「かわいそうだな」「少しでも楽になればいいな」と心の中で願うことしかできなかった。「僕だけじゃない」「僕だけが悪いのではない」と思ってしまった、何もしいまま見ていた。これまでに何度も障がい者の方を見かけてきたが、いつも知らないふりをしていた。

そして、ある時にあの時会ったおじいさんと同じ障がいがある人を見かけた。その時、「僕には何ができるのだろう。」と、自分に何かできることはないかと考えた。僕は、障がい者の方が困っていたら、席を譲ることなど簡単なことならできるのではないかと考えた。自分が障がい者の方にできることがあることに気づき、うれしかった。自分が障がい者の方にできる唯一のことを見つけたからだ。自分以外の人が何もしていなくても、自分から動いて助けた。自分から動いて一人ひとりが暮らしやすい町にできるように自分にできることを探していききたい。世界にとってはとても小さいことかもしれないけれど、自分の中では障がい者の方にできる一番大きいことだと思うから、自分でできることはこれからも続けていききたい

と、今回のことをきっかけに考えることができた。

僕は、誰もが差別されないような社会をつくっていきたいと考えている。誰もがお互いの気持ちを理解し、自分にできることを少しずつでもしていき、一人ひとりが暮らしやすくなるような世の中をつくっていききたい。